

# 中国記録映画の原点を探る

——ソ連映画専門家訪中団（1949年）の影響を中心として——

長 井 暁

## はじめに

中華人民共和国成立から1980年代後半まで、中国では記録映画が当局の政策を宣伝する主要なメディアとして重要な役割を果たした。映像と音声を使って感情に訴えながら情報を伝えることが出来る映画は、文字が読めない多くの大衆に政策を伝える上で、最も有効なメディアだったのである。中国政府は1953年、北京に中央新聞記録電影製片廠（略称、新影）を設立して、記録映画とニュースを集中的に製作して中国全土に配給することで、すべての大衆が記録映画を視聴するシステムを築き上げた。都市部においては映画館のほか、職場（単位）や地域の集会場、講堂などで頻繁に映画の上映会が行われ、人々は半ば強制的に参加させられた。農村部においても映写技師がフィルムと機材を携行して各地を巡回し、野外にスクリーンを張って上映会が行われた<sup>1)</sup>。

このように中国現代史において重要な役割を果たした記録映画だが、その研究はほとんど行われてこなかった。それは、劇映画が中国電影資料館に保存され研究者などに公開されているのに対し、記録映画は中央新聞記録電影製片廠を継承した中央電視台新影制作中心（中央テレビ新影制作センター）に保存され、原則非公開であるためである<sup>2)</sup>。しかし、2003年に中央新聞記録電影製片廠で長年にわたって編集を担当した高維進氏が『中国新聞記録電影史』<sup>3)</sup>を、2005年には中国電影芸術研究中心の研究員である単万里氏が『中国記録電影史』<sup>4)</sup>を著したことにより、

研究の端緒が開かれた。

中国共産党による記録映画製作が、日本の降伏後、満州映画協会（満映）で働いていた日本人の協力を得て開始されたことはよく知られている。しかし、それが中華人民共和国成立後にどのようにソ連式の記録映画に変容し、確立されて行ったのかはよく分からなかった。筆者は既刊の2冊の概説書（通史）によって、1949年から50年にかけて25名のソ連の映画専門家が中国を訪れ、中ソ合作で『中国人民の勝利』、『解放された中国』という2本の記録映画を製作した事実を知った。さらに、テレビのドキュメンタリー番組の制作を通じて、この2本の記録映画を視聴する機会を得た。

本稿ではソ連映画専門家訪中の経緯を紹介するとともに、記録映画『中国人民の勝利』、『解放された中国』の内容分析を通じて、この時、ソ連の記録映画製作の思想と手法が中国に伝えられ、その後1980年代まで中国社会に大きな影響を与えることになる中国記録映画が確立されたことを明らかにする。

## 第1章 ソ連映画専門家訪中の経緯

### 新中国の映画製作

中国共産党が映画の持つ教育・宣伝効果に注目し、独自に撮影に取り組み始めるのは、延安時代の1938年のことである。八路軍総政治部電影団（通称、延安電影団）が成立し、延安での八路軍の活動、南泥湾の開墾、中国共産党第七次代表大会（1945年5月）の模様などを撮影した。しかし、本格的に映画の撮影・製作を始めるのは、1945年10月に中国共産党が満州映画協会（満映）の人員と機材を接收し、東北電影公司（翌年に東北電影製片廠と改名）を設立してからのことである。東北電影は国共内戦の中で、日本人スタッフの指導を受けながら、『民主東北』に代表されるニュース記録映画、人形劇映画『皇帝の夢』、『橋』や『光芒万丈』に代表される劇映画を製作した<sup>5)</sup>。新中国の映画はまさに日本映画の思想と手法を学んでスタートしたのである。そして、1949年に国民党支配下にあった各地の電影製片廠が接收されると、東北電影の中国人スタッフを中心として、北京には北京電影製片廠、上海には上海電影

製片廠が誕生した。

### ソ連映画専門家集団の訪中

そのような状況にあった1949年9月の初め、中華人民共和国の建国を記念して、長編記録映画が製作されることになった。中央電影局の袁牧之局長が会議を招集して議論した結果、この長編記録映画を、北京電影製片廠がソ連の撮影隊と共同で製作することが決定された。中国からの映画専門家の派遣要請に対して、ソ連は2つの撮影隊を中国に派遣して来た。ひとつはエス・ゲラーシモフ監督を中心としたゴーリキー映画撮影所の撮影隊であり、いまひとつはエリ・ワルラーモフ監督を中心としたソ連中央記録映画撮影所の撮影隊である<sup>6)</sup>。

エス・ゲラーシモフ監督は、1928年にレニングラードに創設された「フェクス」に入って映画の仕事を始め、監督として『七人の勇者』（1936年）、『コムソリスク』（1938年）、『教師』（1939年）などの劇映画を製作。独ソ戦が始まるとレニングラードの防衛戦に参加した。1944年に記録映画部門の責任者に任命され、イー・コパーリンと共同監督で記録映画『クリミア会談』、『ベルリン会談』を製作。1947年には国立映画大学の監督科と俳優科の学生たちを指導して、劇映画『若き親衛隊』を製作した。『若き親衛隊』は1,500本のプリントがソ連全土で一斉に封切られ、最初の4日間だけで60万人の観客を動員する大成功を収めた。ゲラーシモフに指導され映画に出演した学生たちは、もっとも若いスターリン賞の受賞者となった<sup>7)</sup>。

エリ・ワルラーモフ監督は1942年に記録映画『モスクワ附近におけるドイツ軍の壊滅』を製作し、監督としての地位を不動のものとした。同映画は1941年度アカデミー賞の記録映画部門最優秀賞を受賞したのである。その後ワルラーモフは激戦中のスターリングラードに派遣されて全戦線を組織的に撮影、記録映画『スターリングラード』（1943年）を完成させた。同映画は1942年度のスターリン賞記録映画部門で第1賞を受賞。その後も『ユーゴスラビア』で1946年度のスターリン賞記録映画部門で第2賞、『ポーランド』でも1948年度と同賞を受賞している<sup>8)</sup>。

1949年9月30日の午後11時、ソ連政府代表団に伴われた25名のソ

連映画専門家が列車で北京駅に到着した。到着が深夜であったにも拘わらず、彼らは翌日に控えた中華人民共和国の建国式典の撮影場所などを確認するために天安門に直行。翌10月1日には早朝から天安門で撮影方法などを検討した後、式典本番の撮影に臨んだ<sup>9)</sup>。

## 完成した2本の長編記録映画

建国式典の撮影の後、エス・ゲラーシモフ監督を中心とするゴリキー映画撮影所・北京電影制片廠の合同撮影隊と、エリ・ワルラーモフ監督を中心とするソ連中央記録映画撮影所・北京電影制片廠の合同撮影隊は、それぞれ数カ月にわたって中国各地で撮影に取り組み、1950年7月17日に『中国人民の勝利』、『解放された中国』という2本の長編記録映画を完成させた<sup>10)</sup>。

ワルラーモフ監督の『中国人民の勝利』（全10巻）は、中国共産党の指導者たちと人民解放軍の中華人民共和国成立にいたる活躍を、歴史的な出来事の再現映像を大規模に撮影して描いたものである。ソ連人作家のカ・シーモノフが脚本を手がけ、文学顧問を劉白羽が、助監督を呉本立と周峰が務めたほか、多くのソ連人カメラマンと中国人カメラマンが合同で撮影を行った<sup>11)</sup>。『中国人民の勝利』は中国・ソ連の双方で公開され、1950年度のスターリン賞記録映画部門で第1賞を受賞した。

ゲラーシモフ監督の『解放された中国』（全9巻）は、清末における帝国主義の中国侵略から、中国共産党指導下の反帝反封建闘争にいたる歴史を紹介した上で、中華人民共和国の誕生以降の社会主義改革によって、中国社会がどのように変化しているかを描いたものである。文学顧問を周立波が、助監督を徐肖冰と蘇河清が務めたほか、多くのソ連人カメラマンと中国人カメラマンが共同で撮影を行った<sup>12)</sup>。『解放された中国』は中国・ソ連の双方で公開され、1950年度のスターリン賞劇映画部門で第1賞を受賞した。『解放された中国』がなぜ劇映画部門で受賞することになったのかは明らかではないが、中国で撮影された2本の映画が同部門で受賞することを避けるために、劇映画部門に回されたのだろう。あるいは劇映画も手がけてきたゲラーシモフ監督が、劇映画部門での受賞を希望したのかも知れない。

## 第2章 記録映画「中国人民の勝利」

### 映画の概要

中華人民共和国成立にいたる中国共産党の指導者たちと人民解放軍の活躍を描いたエリ・ワルラーモフ監督の『中国人民の勝利』<sup>13)</sup>は、中国が広大な国土と長い歴史と優れた文化を持つ国であることを紹介した後、その中国が帝国主義の侵略を受け、その搾取と抑圧によって人々が悲惨な状況に置かれていたことを説明することから始まる。そうした状況から中国を救うべく立ち上がったのが中国共産党であるとし、井崗山での毛沢東による根拠地建設、瑞金でのソビエト政府の樹立、苦難の長征、延安を拠点としての抗日戦争などの歴史が語られる。そして、ソ連軍の援助によって関東軍が粉碎され日本が降伏した後、アメリカと結託した蒋介石が内戦を起こしたとし、国共内戦部分に入って行く。映画で主として描かれているのは、遼瀋戦役、平津戦役、淮海戦役を経て、長江渡河作戦、南京・上海解放に至る人民解放軍の活躍である。映画は1949年10月1日の建国式典の映像で始まり、同年12月のスターリンの70歳誕生日祝賀式典、整列した人民解放軍部隊、天安門広場で『東方紅』を歌う人々の映像で終わっている。国共内戦については従軍した中国人カメラマンによって膨大な記録映像が撮影されていたが、ワルラーモフ監督はそうした映像をほとんど使わず、全編にわたって人民解放軍の各野戦軍の全面的な協力を得て撮影された再現映像を使用している。演出された再現映像に、カ・シーモノフの手による煽情的なナレーションがつけられることで、中国共産党の指導者たちと人民解放軍の活躍がドラマチックに描かれている。

### 再現映像に出演した将軍たち

この映画の特徴の一つは、多くの再現映像に人民解放軍の将軍（実人物）たちが出演していることである。

1948年7月の遼瀋戦役を前にした中国共産党東北局会議の再現映像には、林彪（東北野戦軍司令員）、羅榮桓（東北野戦軍政治委員）、劉亜楼（東北野戦軍參謀長）、高崗（東北局副書記）、陳雲（東北局副書記）などが登場する。林彪は毛沢東の命令を記したメモを読み上げ、高崗、

陳雲といった東北局の委員たちと握手をして別れを告げ前線に向かう。錦州攻略戦の再現映像では、林彪、羅榮桓、劉亜楼が双眼鏡を手に、前線で指揮をとっている。

1949年1月の天津攻略戦の再現映像では、天津を包囲した人民解放軍の平津前線司令部で、林彪が地図を指さしながら、羅榮桓と聶榮臻（華北軍区司令員）に平津作戦について説明する。そして、1月13日、国民党軍天津守軍指揮部への投降勧告の期限が過ぎ、劉亜楼参謀長による命令で一斉に攻撃が始まる。

1949年2月の人民解放軍北京入城式の再現映像では、前門付近に設けられた壇上から、林彪、羅榮桓、聶榮臻が手を振って群衆の歓呼の声に答えている。

1949年4月の長江渡河作戦の再現映像では、第二野戦軍司令部で地図を見る劉伯承（第二野戦軍司令員）と、第三野戦軍司令部で地図を前に作戦を検討する陳毅（第三野戦軍司令員兼政治委員）、粟裕（第三野戦軍副司令員）などが登場する。

## 人民解放軍の戦歴名場面の再現

人民解放軍の戦歴名場面の再現は、どれも劇的なシーンとして描かれている。

1949年1月の天津攻略戦では、「橋上会師」の場面が劇的に再現されている。東北と西南の両方向から天津を攻撃した人民解放軍の2つの部隊が、天津のシンボルとなっていた鉄橋付近で出会う。2つの部隊の兵士たちはほぼ同時に鉄橋を渡り始め、橋の中央部を目指して走って行く。両サイドから駆け寄って来た兵士たちが橋の中央部で出会い、旗を振ったり、飛び跳ねたり、肩を叩きあったり、握手をしたりして喜び合う姿が、アップショットで映し出される。ワルラーモフ監督は別々に戦ってきた2つの部隊の感動的な出会いという場面を好んだようで、そうした場面がこの映画の随所に登場するが、兵士たちが喜ぶ様子はどれもパターン化された演出である。1948年11月の淮海戦役の再現映像では、陳毅將軍の指揮する第三野戦部隊と、劉伯承將軍の指揮する第二野戦部隊が出会う場面でも、平野で2つの部隊が合流し、握手をしたり肩を叩いたり抱き合ったりして喜んでいる。また、1949年4月の長江渡河戦

の後、南京を目指す人民解放軍の部隊と江南遊撃隊が出会う場面でも、山中を進む人民解放軍部隊に四方八方から江南遊撃隊の無数の隊員たちが駆け寄り、銃を担いだ両部隊の隊員たちが、拳を振りあげたり握手をしたりしながら喜び合っている。

1949年4月の南京解放のクライマックスは、蒋介石の総統府へ突入する人民解放軍の兵士たちの姿である。兵士たちが総統府の門をくぐって行くのと同時に、門の上に掲揚されていた国民党の青天白日旗が降ろされる。総統府の廊下を奥へ奥へと走る兵士たちの姿は特殊な機材を使って撮影され、兵士を後ろから追いかけるドリーショットが延々と続く。これはセルゲイ・エイゼンシュテイン監督が使った演出手法とよく似ている。壁から取り外される蒋介石の肖像画。椅子が整然と並んだ総統府の礼堂。卓上のカレンダーが1949年4月22日のままになっている蒋介石の執務室。そこに「見よ！これが人民への叛徒、アメリカの走狗にして首切り役人である蒋介石の総統府である。見よ！これが人民の敵の巢窟である。ひところ前まで蒋介石は、『南京を放棄するぐらいだったら、むしろ自殺する』と、ここで誓いを立てていた。見よ！この壇上で彼は、『共産党を殲滅させられなかったら、死んでも死にきれない』と誓っていた。4月22日は、叛徒が逃げ出した日であり、解放軍がやって来た日である」という煽情的なナレーションがつけられている。

1949年5月の上海解放は、市街戦を展開する人民解放軍部隊の姿の後、上海を象徴する建造物の一つ、ブロードウェイ・マンション（上海大廈）の屋上に掲げられていた国民党の青天白日旗が、人民解放軍兵士により降ろされ、屋上から地上に投げ落とされる再現映像で象徴的に描かれる。その映像には、「これらの摩天楼は、帝国主義による中国統治の象徴であり、彼らの指揮の下で、蒋介石は長期にわたって革命を弾圧してきた。上海は解放された！」というナレーションがつけられている。

## 大衆に支持される人民解放軍

この映画が再現映像を使って最も強く訴えようとしているテーマは、人民解放軍がいかに中国の大衆（人民）に支持され、愛されているかということである。

映画冒頭を飾る建国式典の映像では、天安門広場を埋め尽くした数十万人の群衆、天安門の壇上に立つ劉少奇、周恩来、高崗、張瀾、李濟深、宋慶齡といった指導者たちの姿が映し出され、そこに毛沢東と朱徳が現われる。これらの映像は1949年10月1日に式典当日に撮影された実写の記録映像である。しかし、この映像の随所に挿入されている、銅鑼・太鼓・喇叭を鳴らして喜ぶ農民、歓呼の声を上げ、旗を振り、手を振りかざし、拍手をする大衆や学生のアップショットは再現映像である。中華人民共和国の建国を中国の大衆がいかに喜んでいるかを強調するために、後日、大衆が喜ぶ様子のアップショットを別撮りし、天安門広場で撮影された建国式典の実写の記録映像にモンタージュしたのである。喜ぶ大衆の姿はどれもパターン化された演出である。

実写の記録映像に再現映像をモンタージュし、共産党への大衆の支持を描いた場面としては、抗日戦争中に延安を目指す学生や若者たちの映像がある。当時延安で撮影された毛沢東の演説や朱徳、彭徳懐の記録映像に、黄土高原を歩く若者たちの隊列、延安に到着し歓迎される若者たちの再現映像をモンタージュすることで、当時、学生を中心とした中国の若者たちが、「本当の抗日の拠点は国民党の重慶ではなく共産党の延安だ」と認識していたことを強調している。

農民における共産党支持の拡大は、国共内戦中の解放区で繰り広げられた土地改革と、土地を得た農民の子弟の人民解放軍への参加という再現映像で説明されている。村々では地主から没収された土地が農民に分配されていく。地主の犯罪を告発する集会が開かれ、人々は次々に自らが受けた迫害の模様を訴え地主を批判する。土地を分配された農民の子弟たちは、共産党の政策を擁護するために続々と軍隊に加わってゆく。各村では軍隊に加わる若者たちの首に女性たちが花輪をかけて送り出す。訓練を受けた若者たちは、やがて立派な人民解放軍兵士に成長してゆく。

新しく解放された都市での大衆の支持は、人民解放軍の規律の厳密さと関連づけて描かれている。解放された天津の街中には、「民衆からは針一本、糸一本とってはいけない」から始まる「三大規律八項注意」が貼り出された。路上で鍋を使って料理をする解放軍炊事兵の所に老婆がやってきて、鍋に野菜を入れようとする。兵士は手を振って断るが、老



婆は隙を見て野菜を鍋の中に放り込む。その行動をナレーションは、「炊事兵はこの規定を遵守しようとした。しかし、このお婆さんにはお婆さんの見方があった。彼女は戦士たちを自分の子どものように見ていたのである」と説明する。

解放された都市ではどこでも人民解放軍が市民から熱烈に歓迎される様子が、劇的な場面として描かれている。その中で最も完成度が高い再現映像は、1949年2月3日に行われた解放軍の北京入城式の場面である。前門大街を埋め尽くす群衆と、その中を永定門方向から北上してくる人民解放軍兵士たちの姿が、前門の楼上から撮影されている。前門大街を埋め尽くした群衆は、少なくとも数万人はいるように見える。軍楽隊を先頭に前門大街を行進する人民解放軍の兵士たち。手に小旗を持ち、旗を振り、飛び跳ねながら喜ぶ北京の市民たち。市民の拍手のなかを行進する兵士。壇上から手を振る林彪、羅榮桓、聶榮臻といった将軍たち。手を振って歓呼の声を挙げながら迎える女性たち。兵士たちに花束を捧げる女子大生。手に持った花を振り歓呼の声を上げる群衆。屋根の上に毛沢東の肖像画を掲げた軍楽隊のトラック。楽器を振り上げる市民。トラックに牽引された大砲の上に乗る手を振って喜ぶ青年。この再現映像には、「中国の青年はこのように自らの軍隊を熱愛しているのである。彼らは大砲の上によじ登った。人民と人民の軍隊は完全に抱擁してひとつになったのである」というナレーションがつけられている。

撮影には数万人の北京市民と数多くの人民解放軍の兵士が動員された。実際の入城式では市民の歓迎はあったが、これほどの規模のものではなかった。都市の住民にとって、それまで農村部を中心に活動してきた共産党はまだ馴染みの薄い存在だったからである。この再現映像はその完成度の高さから、長らく日本でも実写の映像だと理解され、このとき撮影された写真も実際の北京入城時の写真として多くの書籍に掲載されてきた。こうした「人民解放軍を歓迎する市民」の表現方法はパターンされ、ほかの都市の解放を描いた場面でもしばしば同じような再現映像が登場する。

映画では人民解放軍の戦闘を支援する大衆の姿も再現映像で随所に描かれている。淮海戦役の再現映像には、負傷した兵士を担架で担いで運ぶ農民たちの姿がある。ナレーションは「人民解放軍の勝利は戦士たち

の勇敢さの賜物であるだけでなく、同時に山東省の百万を超える労働者と農民の勇敢な支援の賜物でもある。百万を超える担架隊が前線を走り、共産党と人民解放軍を支援したのである」と説明する。

1949年4月に長江渡河作戦の直前には、兵士たちを慰問するために付近の農村の民衆たちが食糧などの贈り物を持ってやって来た様子が再現される。民衆は兵士と握手し、その胸に花を付け、鍋から食べ物を碗によそって兵士たちに渡している。ナレーションは「付近の農村の民衆たちが贈り物を持ってやって来た。明日、人民の自由のために戦おうとしている人々に感謝の気持ちを表すために」と説明する。長江渡河作戦にも多くの民衆が参加したことも描かれている。櫓をこぐ男性、帆をあやつる老婆の姿には、「見よ！ これらの木造船は、流域の民衆（老百姓）の船である。彼らは自分たちの渡河作戦部隊を船で運ぶためにやって来たのである。船の上で兵士たちと一緒にいるのは青年、子どもと母親たちである。彼らは自ら戦士たちを南岸に送りどけたのである」というナレーションがつけられている。

## 中国革命とソ連

中ソの合作映画ということもあり、ロシア革命、ソ連軍、スターリンとの関係が随所に描かれている。

映画冒頭の建国式典で、天安門広場のセンターポールに五星紅旗が掲げられた映像には、「見よ！ この新しい共和国の国旗を。これこそ中国人民のすべての民主勢力の団結の象徴であり、この旗には偉大なロシア10月革命の光輝が反映されているのである。なぜなら10月革命は全世界人民の、自由と解放の闘争を覚醒させたからである」というナレーションがつけられている。

1945年8月のソ連の対日参戦と日本の降伏は、中国地図の東北地方に翻った日章旗が次々に紅旗に代わって行く映像で表現され、そこに、「1945年8月、戦う中国への援助を開始したソ連軍が関東軍を粉砕したことにより、日本は降伏した。中国人民の心の中には、自由中国のために犠牲となったソ連軍戦士のことが永遠に記憶されるだろう」というナレーションがつけられている。そして、ハルビンに建設された「蘇聯紅軍紀念碑」と、その前に沈痛な表情で立つ中国の人々の姿が映し出され

る。

スターリンの70歳の誕生日を祝う北京の祝賀パレードの映像では、人々が彼の肖像を描いた垂れ幕を掲げ、手に様々な贈り物を持って行進する様子が映し出され、「中国人民がこの偉大な勝利を収めた時、全世界の先進的な人類は、全世界の労働人民の領袖であるスターリン同志の70歳の誕生日を祝っていた」と説明されている。人民解放軍の部隊での祝賀式典では、兵士たちが壇上に登り、次々と花束を朱徳に手渡す。この映像は「中国の労働者、農民、知識分子、人民解放軍の兵士たちは一致して興奮した心情で、この偉大な共産主義の指導者に感謝と敬愛の念を抱いた」と説明される。さらに映像は、スターリンの巨大な肖像画の前で演説する朱徳、拳を振り上げる兵士たち、上空を通過する戦闘機、拍手する兵士たちへと続いてゆく。モスクワの大劇場で開かれたスターリンの誕生日を祝う式典では、スターリンと毛沢東が並んで立ち、拍手している様子が映し出される。ナレーションでは、「この日モスクワでは、世界の多数の国からやってきた共産党の指導者たちの中心に、勝利を収めた我々中国人民の領袖毛主席とスターリン同志と一緒に立った」ことが強調されているのである。

## アメリカと蒋介石・国民党軍

カ・シーモノフが手がけたナレーションでは、アメリカと蒋介石、そして国民党軍は常に一体のものとして語られ、その愚かさや滑稽さが強調されている。

映画冒頭の建国式典の場面では、祝砲を放つ大砲の映像に、「この大砲はトルーマンが蒋介石に送ったものである。彼らはこの大砲が蒋介石の勝利を祝うのではなく、中国人民の勝利を祝うことになろうとは、絶対に想像できなかったのである」というナレーションがつけられている。さらに、朱徳総司令によるオープンカーでの閲兵と、整列した歩兵部隊、高射砲部隊、装甲車部隊、戦車部隊の映像には、「彼らが手にしているのはアメリカの自動小銃である。彼らはアメリカの大砲で武装している。彼らはアメリカの装甲車に乗っている。彼らが操縦しているのはアメリカの戦車である」というナレーションがつけられている。そしてこの場面を締めくくるナレーションは、「これらはすべてトルーマンが蒋介石

に送ったもので、戦闘の中で我々の戦利品となったものであり、解放軍はこれらの戦利品をこの祝日のために捧げたのである。毛主席が早くから言っていた『アメリカは我々の軍需倉庫であり、蒋介石は我々の輸送大隊長である』という英明な予言は実現したのである」というものである。

国共内戦勃発の経緯は、アメリカの国旗と、上海の埠頭でクーリーに担がれて荷揚げされる荷物、アメリカ製とされる砲弾と大砲、国民党の青天白日のマークをつけた戦車（実際には人民解放軍が多く使っていた日本製のもの）の映像を組み合わせさせて見せ、アメリカと蒋介石が結託して共産党との内戦を開始したことを印象づけている。そして、激しい戦闘や国民党兵士の屍が散乱した戦場の再現映像を使って、「国民党匪は全世界に向かって自らの勝利を吹聴した。たしかに最初の8カ月にうちに国民党は105の都市を占領したが、70万以上の部隊を失ったのである」と、内戦初期の状況を説明する。

国共内戦の再現映像の中には、国民党軍の降伏の場面のパターン化された再現映像が随所に登場する。錦州攻略戦の再現映像では、手や頭に包帯をした国民党軍の兵士たちが次々に投降してくる。広場で武装解除を受ける国民党軍の再現映像では、人民解放軍の兵士に取り囲まれた広場に戦車が2両と大砲が2門整然と並べられている。錦州での戦いのラストショットは捕虜となった国民党軍の2人の高級将校の姿である。彼らの軍服には階級章が付いていない。

瀋陽解放の場面でも、捕虜となった国民党軍の高級将校が描かれている。1人は眼鏡をかけ軍帽をかぶり、厚手のコートを着ている。もう1人は平服で軍帽も被らずテーブルの前に座って、誰かに向かって話をしている。1人の高級将校が、軍服姿で軍帽をかぶり、テーブルに座って人民解放軍の兵士と話をしている。彼らの軍服にも階級章などはついていない。こうした高級将校はすべて実人物のように思われる。

淮海戦役の再現映像では、国民党軍の杜聿明兵团への激しい攻撃の後、降伏した国民党兵士の長蛇の列の映像が続く。捕虜となった杜聿明將軍の姿が映し出される。將軍は実人物だが、階級章が付いた軍服や、徽章が付いた軍帽などは着用していない。

映画の終盤では、中国のほぼ全土が解放されたことが、中国地図いっ

ばいに立てられ、掲げられた無数の紅旗での映像と、続々と投降する国民党軍兵士の隊列の再現映像（ドリーショット）で表現されている。そこには、「中国人民のこの勝利は、国民党集団の恥ずかしい失敗であるだけでなく、彼の主人であるアメリカの失敗であり、世界の帝国主義の失敗である」というナレーションがつけられている。

### 映画のエンディング

映画のエンディングは、のどかな農村風景、農作業をする人々、瀋陽の工業地帯の風景の映像に、「中国人民は初めて平和な春の息吹を感じていた。若芽が葉をいっぱい茂らせた枝に成長するために、花園に花が満開するために、自由な人間が自由な土地で仕事ができるようにするために、中国の工業がソ連の援助の下で成長するために、中国が強大となり、帝国主義から離脱し独立するために、人民解放軍は20年あまりにわたって勇敢な戦いを続けてきた」というナレーションがつけられている。さらに、整列した人民解放軍の部隊の映像には、「現在人民解放軍は自由な中国の上に直立不動の姿勢で立ち、4億7千5百万人の中国の平和建設の労働を護り、戦闘によって獲得した人民民主制度を護っている。全中国の青年は、広東から北京にいたるまで自由な春を迎えた」というナレーションがつけられている。

そして、解放を祝う中国各地の人々、紅旗の隊列の映像では、「中国人民は大声で叫ぶ。中国人民の偉大な勝利万歳！ マルクス・レーニン主義思想の勝利万歳！ 勇敢な人民解放軍万歳！ 毛主席万歳！」が唱えられる。

映画は、天安門広場での祝賀式典で歌い踊る田植え歌隊の人々と紅旗の隊列。天安門の前に整列し、『東方紅』を歌う田植え歌隊の人々。毛沢東の肖像画を先頭に掲げて走る機関車と車窓からの田園風景の映像に、「毛主席は言う。『ここから中国の歴史の新しい紀元が展開される。中国の土地は自由になった！ 中国の大地に美しい春が出現した。解放された中国人民の未来は光り輝いている』」というナレーションで終わっている。

### 第3章 記録映画「解放された中国」

#### 映画の概要

中華人民共和国の誕生以降の社会主義改革によって、中国社会がどのように変化しているかを描いたエス・ゲラーシモフ監督の『解放された中国』<sup>14)</sup>は、まず中国が広大な大地と四千年の歴史を有する国家であることに触れた上で、封建主義と近代以降の帝国主義の侵略によって民衆が悲惨な状況に置かれたことを説明する場面から始まる。こうした状況から抜け出すために中国の人々は反帝反封建の闘争を展開するが、外国軍と結託する蒋介石を中心とする国民党反動派によって頓挫させられたとする。そこでロシア革命の影響を受けて誕生した中国共産党が立ち上がり闘争を展開、南昌蜂起から井岡山での毛沢東による革命根拠地の建設、瑞金での中華ソビエト共和国臨時政府の成立、長征を経て、延安を拠点に抗日戦争に勝利する。そして、蒋介石がアメリカの支援を得て引き起こした内戦にも勝利し、中華人民共和国を建国したと説明する。その上で、新中国で始まった様々な改革と、それによって幸福な生活を送れるようになった中国の人々の姿を、新たに撮影した映像で紹介してゆく。中国共産党中央の指示によって進められる堤防の修築、内戦で破壊された鉄道や工場の復旧作業。そこに登場する労働者は一様に明るく勇ましい。そして革命歌劇『白毛女』と、農村で進められた土地改革における地主への批判集会の映像を使って、旧社会の悲惨さと、そこから人々を救いだした中国共産党の偉大さが強調される。

中国共産党中央の指示に基づく新しい政策は次々と実現されてゆく。それは、農民への種籾の貸付、荒地の開墾、トラクター学校の設立、水力発電所や工場の復興、労働者のための診療所や療養所の建設、保育園・小学校・中学校・大学での教育事業、労働者学校や大人のための識字教育などである。こうした事例を次々に見せることで、中国共産党の政策の正しさと、新しい中国社会の素晴らしさが強調されている。そして映画の終盤では、青年文芸工作団の出し物を通じて、アメリカと結託する醜い蒋介石の姿、それを懲らしめる勇敢な中国の人々を見せた上で、帝国主義が発動しようとしている新たな戦争に警戒しなければならないとし、ソ連との同盟の重要性を強調する。そして最後は毛沢東とスターリ

ンという2人の偉大な指導者の下で前進することを訴えているのである。映画の後半はエス・ゲラーシモフ監督が中国に滞在した1949年から50年にかけて、中国で実際に進行していた出来事を撮影した映像を中心に構成されている。しかし、そうした映像の多くはテーマを際立たせるために、様々な演出がほどこされており、実際の出来事があるがままに撮影した映像はほとんど見受けられない。

### 悲惨な生活を強いられる中国の民衆

北京の城壁と城門、紫禁城を見せながら、ここを拠点に清王朝が300年にわたって人々を苦しめる残酷な政策を実行したと説明する。さらに、上海の映像を使って、帝国主義の中国侵略によって中国の労働者がいかに悲惨な状況に置かれていたかを説明する。ここで使われている映像は、上海の共同租界の中を粗末な服を着て荷物が満載された荷車を引く中国労働者の姿である。そこでは、外国商店の華やかなショーウィンドーと、苦しげに重い荷車をひく中国人労働者の姿がコントラストをなすように描かれている。

ソ連では1920年代から、悲惨な境遇にある民衆を象徴するイメージとして、船を綱で引きながら河岸を喘ぎながら歩く「船引き」の姿が絵画や映画でしばしば描かれてきた。中国ではそれが、街中を重い荷車を引く労働者の姿に置き替えられたのである。そしてナレーションでは、外国の企業が利益を上げるために中国人の労働者は馬や牛のような生活を強いられ、過度な労働によって彼らの寿命が半分に縮められたと説明する。さらに、黄浦江の水上生活者の映像を使って、貧しい中国の労働者は小舟の上での惨めな生活を強いられたと説明している。

### 反帝反封建闘争と4・12クーデター

絵画と写真を使って、民族の英雄・林則徐がアヘンを没収して焼却したことを口実にイギリスは戦争を発動し不平等な南京条約を結ばせたこと、洪秀全が指導した太平天国の革命が失敗したこと、反帝国主義の義和団運動が列強の軍隊によって残酷に鎮圧され北京が占領されたこと、孫文が指導した辛亥革命によって清朝の専制支配が打倒されたことを説明する。そして、ロシアの10月革命によって中国にマルクス・レーニ

ン主義がもたらされ、1921年7月の中国共産党の第一次全国人民代表大会が上海で開かれたこと、孫文が中国共産党による統一戦線の主張を受け入れ、共産党との合作によって反帝反封建闘争を進めたことを解説する。

しかし、その闘争は1927年の蒋介石による4・12クーデターによって挫折したとする。ここでは列強軍が行進する様々な映像を見せた上で、何かの式典かイベントに臨む外国人将校と外国人夫人の映像に、銃殺される共産党員や労働者の映像をモンタージュすることで、あたかもこの惨殺を外国人が喜んで見物しているようなイメージを作り出し、このクーデターが蒋介石を中心とする国民党反動派と外国軍が共同で引き起こしたものであると説明するのである。そして、「婦女は侮辱され、男は奴隷のように酷使された。しかし、勇敢な人民は先の者に続いて次々と勇気を奮い起して前進した」というナレーションで、帝国主義の弾圧と、それに抵抗する勇敢な民衆というパターン化された図式を提示する。

## 立ち上がった中国共産党

反帝反封建闘争の挫折を受けて、中国共産党の新たな闘争の歴史が始まったとする。まず、1927年8月1日の南昌蜂起から井岡山での毛沢東による革命根拠地の建設、朱徳の部隊との合流、瑞金での中華ソビエト共和国臨時政府の成立、蒋介石による5次にわたる進攻により長征にいたる経緯が、南昌、井岡山、瑞金の実写映像と絵画を使って解説される。そして、延安の実写映像と、延安時代の毛沢東や抗日軍政大学、八路軍などの記録映像を使って、抗日のために共産党が打ち出した統一戦線の主張のもと、西安事変を平和裡に解決し、紅軍を八路軍と新四軍に改編し、日本軍の侵略に対して持久戦を進めたことが説明される。さらに、日本の降伏の後、蒋介石が米国の支援を得て引き起こした内戦を、毛沢東の指導の下で進められた偉大な自衛戦争によって勝利したことが、国共内戦の記録映像で説明される。ナレーションでは、スターリンの25年前の、「中国の革命勢力はまだ信じるができない。その勢力はまだ十分に現われていない。しかし将来、彼らは現われることが出来るだろう」という言葉を引用し、その予言が完全に実現したと強調している。



## 新中国の誕生とソ連の承認

この映画の前半のクライマックスは、北京で開かれた中華人民共和国の建国式典である。映像は『中国人民の勝利』で使われているものとはほぼ同じである。天安門の壇上に立つ毛沢東、朱徳、劉少奇、宋慶齡、周恩来といった中央政府の指導者の姿が映し出された後、「義勇軍行進曲」が流され、中華人民共和国の新しい国旗と国歌が紹介される。軍隊のパレードの記録映像には、「このトラック、大砲、戦車はトルーマンが彼の走狗である蒋介石に、人民の解放運動を鎮圧し、米国の統治を確立するために送ったものである」と説明されるが、映し出されるのは日本製の戦車である。そしてソ連が最初に若い中華人民共和国を承認したことが強調され、周恩来と握手をするソ連大使と、開設されたソ連大使館の映像が映し出される。

## 共産党の指導による新国家の建設

会議で毛沢東が演説する姿が映し出され、「政治協商共同綱領において、封建的な土地制度を消滅させ、遅れた農業国家を強大な工業国家に変貌させるために、政府が土地改革、経済復興、災害や凶作に対する緊急援助などを実行することが定められた」と説明する。その後、中国各地で進められた復興と建設の様子が次々と紹介されてゆく。中央政府の指示に基づいて山東省政府が大衆と軍隊を動員して行った黄河の堤防修築工事では、大衆の労働への情熱は工具欠乏の困難を克服したことが、共産党員と新民主主義青年団の団員が指導的な役割を果たしたことが説明される。工業建設の労働者と共産党指導者の密接な関係を示すものとして、戦争で破壊された自動車工場を修復する労働者を朱徳が訪問し、労働者に熱烈に歓迎される様子が紹介される。国民党によって破壊された鉄橋を鉄道労働者が修復する様子、粵漢鉄道の修復が終わり広州と北京を結ぶ鉄道の開通式の模様を伝えるとともに、女性の鉄道労働者が国家建設に貢献していることが紹介される。上海の紡績工場では、女工たちが政府発行の公債を率先して購入する様子、彼女たちが新しい労働方法を採用して増産を実現したことが紹介される。「前進者を称賛し、落後者を批判する壁新聞」に見入る労働者は全員満面の笑顔をしている。レフ板で太陽光が顔に当てられているとみえ、顔が異様に輝いて見える。

この映画に登場する中国の人々の表情は、希望に満ち溢れた笑顔と、新国家建設への強い意志を示す勇ましい表情という二つのパターンのみで描かれている。

### 脅威の存在と同盟国ソ連

国民政府軍の飛行機による上海爆撃の映像が映し出され、「我々が平和建設に従事した正にその時に、蔣介石はアメリカの飛行機を使って上海の平和な住民を爆撃した」と脅威の存在を説明する。その上で、1950年2月14日に行われた「中ソ友好同盟相互援助条約」の調印式の映像には、「この条約は世界の平和と安全に偉大な貢献がある」というナレーションがつけられ、調印時にスターリンと毛沢東が並んで立ったことが強調されている。そして十数万人が参加して北京で開かれた祝賀式典の映像には、発言者の多くが「この条約は我が国の建設事業の大きな助けとなるとともに、両国の友好と文化交流の前途に大きな希望を与える」ものであると指摘したことが紹介されている。

### 旧社会で受けた搾取や迫害の告発

この後映画は、上海の劇場で行われた革命歌劇「白毛女」公演の様々と、観客の様子が時間をかけて詳しく紹介している。観客は、借金の抵当として売られ、地主の屋敷で弄ばれた末に、山の洞窟に逃れて白髪となった主人公の境遇に涙し、やがて村が解放されて主人公が救い出され地主が打倒される様子に喝采する。最後に立ちあがって拍手する観客の姿には、「現実主義の芸術は、人民の実際の生活を反映している」というナレーションがつけられている。その後映画は、河北省で進められる土地改革の映像へと続いてゆく。北京近郊の深溝村では農民を迫害した地主の批判集会が開かれ、農民たちが次々に演壇に立って、地主から受けた迫害の事実を村人に向かって告発する演説を行い、地主に向かって罵声を浴びせる。地主から没収した土地は測量され、貧農や雇農に分配される。古い土地登記証書は村人が取り囲む中で焼き捨てられ、村人が拍手喝采する。そして、新しい土地登記証書が村人に一人一人手渡される。そして拍手して喜ぶ農民たちの姿には、「土地改革は中国の歴史上、天地を転覆させるような一大事であり、これは中国共産党が提起し、全

国の人民が擁護した政策であり、農民に繁栄と幸福の道を切り開くものである」というナレーションがつけられている。

### 共産党の農民への政策

共産党中央の指示に基づいて、農民支援の政策がすすめられてゆく。政治局会議の映像として毛沢東、朱徳、劉少奇、周恩来、林伯渠の姿が映し出され、「会議では貧農に春に蒔く種籾の貸付問題が討論された」と説明される。この中央人民政府の決定に基づいて、実際にどのように種籾を分配するかが区委員会で話し合われた。その結果、まず農家の実情をよく調べて、本当に貧しい農家から貸し付けることになる。工作隊員たちはそれぞれの担当地区へ調査に赴いた。女性の工作隊員劉宝林は深講村の農家を回って実情を調べた上で、ある朝全農民を集会所に集めて政府による種籾の貸付政策について説明し、本当に必要な人から種籾を貸し付けていった。その後、地主から没収された農具が分配された。土地と農具を手にした農民たちは、初めて自分の土地での農作業に従事していった。ここに登場する共産党員は、苦労も厭わず献身的に農民に奉仕し、彼らから信頼され愛される存在として描かれている。

### 進む復興と新国家の建設

再び全国で進められた復興と建設の模様を紹介した上で、新国家建設における「中ソ友好同盟相互援助条約」の意義が強調されるとともに、共産党指導者と労働者の親密な関係が描かれる。まず江西省人民政府が全省に呼び掛けて行われた荒地開墾作業の様子が紹介される。労働者、農民、兵士、学生、事務職員が、国民党からの戦利品であるトラクターを活用して開墾を進めていった。全国に設立されたトラクター・ステーションとトラクター学校の様子も紹介され、男性と同じように女性もトラクターを運転して国家建設に参加できることが強調されている。さらに1950年4月11日に中央人民政府で開かれた「中ソ友好同盟相互援助条約」など、ソ連との間に調印された3条約を批准する委員会の模様が映し出され、周恩来と毛沢東の演説が同時録音の音声を使って紹介される。委員会では同上の条約が批准された。国民党に破壊された各地の工場、水力発電所などで修復が終わり、生産が再開された模様も紹介され

ている。四川省の重慶で再開された冶金工場には、西北軍政府の指導者、劉伯承、賀竜などが参観に訪れ、感激する労働者と握手を交わしている。

## 新しい中国社会の素晴らしさ

ここまでは新国家建設の前進が強調されているが、以降は新しい中国社会の素晴らしさが様々な事例で紹介されている。まず、政府が労働者のために設立した無料診療所、規模が大きく新しい設備が完備された都会の病院、労働者のための大連の療養所、軍事委員会直属の保育園で食事をとる園児たちの姿が紹介される。次に小学校・中学校・大学などで進められる教育事業が紹介される。初級小学校の紹介では、児童たちは朝礼で国歌を斉唱しながら国旗を掲揚した後、それぞれの教室で授業を受けている。また、休み時間に校庭で踊りや様々な遊びに興じる子どもたちの姿が同時録音された子どもの声とともに紹介されている。女子中学校では、共産主義少年団＝ピオネールの集会の様子が紹介されている。北京国立師範大学の映像では、昼間の講義や学生などの様子に加えて、夜学についても紹介されている。これは共産党と共和国政府の号令の下、字が読めない人々に向けた文化学習である。北京の清華大学は国民党時代に多くの学生が学生運動に参加した大学として紹介され、蔵書が豊富な図書館や、設備が整った実験室で学ぶ大学生の姿が映し出される。北京の古い廟の野外で開かれている労働者学校では、副校長が「弁証唯物論」の講義をしている。

これら新しい中国社会の素晴らしさを伝える映像は、小学校の校庭で遊ぶ児童のカットにいたるまで、すべて演出（演技指導）して撮影されたものである。

## 帝国主義との戦いは続く

青年文芸工作団の出し物を通じて、アメリカと蔣介石という敵の存在、勇壮な中国の大衆、同盟国ソ連というイメージを提示した上で、平和宣言署名大会の映像を使って、帝国主義国との戦いがさらに続くことを説明する。

青年文芸工作団が演じているのは、アメリカの「パパ」からお金をもらう蔣介石を大衆が懲らしめる風刺劇、勇壮な腰鼓の踊り、龍の舞、旗

を使った京劇団員によるアクロバット、刀を振りかざしての踊り、ロシアの伝統的な民間舞踊とコサックダンスである。北京市の平和宣言署名大会で「和平宣言」に次々に署名する人々の姿には、「我々は各国人民と一緒に帝国主義が発動しようとする戦争の陰謀に反対し、世界平和を断固擁護しなければならない」というナレーションがつけられている。周恩来、宋慶齡、郭沫若といった指導者が署名する映像も紹介されている。大会の最後には白い鳩が一斉に放たれた。そして、集まった群衆の映像を使って、「長年の戦争の惨禍を経て中国人民は平和運動の価値を知った。幸福の鍵は自らの手の中にあるのだ。全国の人民は皆知っている。和平への闘争において我々は孤立していない、我々と一緒に立つのは偉大なソ連邦という盟友であり、新民主主義国家の人民と、そのほかの平和を愛する人民である」と強調している。

#### 偉大な指導者・毛沢東とスターリン

映画のエンディングは5月1日のメーデーのパレードと、それを天安門の壇上から謁見する毛沢東、周恩来、朱徳、劉少奇といった指導者の姿である。パレードにはスターリンの肖像が登場し、「中国人民の最も良い友人、偉大なスターリンの肖像」と説明されている。そして「我々は帝国主義と封建主義の鎖を打ち砕いた。我々の民族は二度と、侮辱を受ける民族にはならない。我々は永遠に立ち上がったのだ。我々は心を一つにし、毛主席とともに、わが祖国の繁栄と強盛という目標に向かって、大規模な建設を進めてゆく。栄光は偉大な人民に帰する。栄光は偉大な中国共産党に帰する。栄光は我々の指導者毛沢東に帰する。彼は我々がしっかりと歩調で勝利から勝利へ向かうよう導いてくれるのである」というナレーションでしめくくっている。最後はパレードする人々が掲げた赤旗を画面いっぱいに取り切った映像で終わっている。

### 第4章 ソ連映画専門家訪中団が中国映画に与えた影響

#### 受け継がれた思想と手法

『中国人民の勝利』と『解放された中国』という中ソ合作記録映画の内容を分析すると、これらがその後の中国映画に大きな影響を与えたこ

とが明らかになってくる。この2本の記録映画に見られるテーマの設定の仕方、ストーリーの展開、演出や表現の手法、撮影の技法を、その後製作された数多くの中国映画に見ることができるのである。

『中国人民の勝利』が描いた「帝国主義と封建主義に抵抗する民衆と、それを指導する共産党と人民解放軍」というテーマで、その後数多くの中国映画が製作されている<sup>15)</sup>。そうした映画の多くで、『中国人民の勝利』と同様のパターン化された映像表現と、煽情的なナレーション表現の手法を見ることができる。登場する共産党員と人民解放軍兵士は常に英明にして勇敢で、大衆に愛され熱狂的に支持される存在として描かれている。一方、敵であるアメリカと蒋介石は、愚かで醜く、滑稽な存在として描かれる。そして国民党の軍隊は、人民解放軍によって容易に打ち倒される「張り子の虎」として描かれ、投降してぞろぞろと歩く捕虜のイメージで象徴されているのである。

また、『解放された中国』が描いた「新旧の社会を対比し、新中国の素晴らしさを称賛する」というテーマでも、数多くの映画が製作されている<sup>16)</sup>。そうした映画では、『解放された中国』と同じように、過去の貧困や虐待といった苦難が、感情移入しやすいエピソードで紹介されている。新中国の素晴らしさを描く部分には、必ず大衆のためにはどのような苦労をも厭わない献身的な共産党員と、笑った表情か、勇ましい表情をした大衆が登場する。笑顔は幸福であること、あるいは将来へ希望を抱いていることを表現しており、勇ましい表情は新国家建設への意欲を表現しているのである。そして映画の最後では必ず、それを実現した毛主席と中国共産党に感謝し、その指導に従っていこうと訴えているのである。

『中国人民の勝利』と『解放された中国』という2本の中ソ合作記録映画の製作に参加した中国人スタッフたちは、ソ連の映画専門家との共同作業を通じて、ソ連の記録映画製作の思想と手法を学びとり、その後の映画製作に活かしていったのである。

## 再現映像という手法の問題点

この時中国に伝えられたソ連の記録映画製作の手法の中で、その後、大きな禍根を残すことになるのは、再現映像という演出手法とその使わ

れ方の問題である。

すべてが創造された映像からなる劇映画と異なり、記録映画は実際に起こった出来事を、その現場で撮影した映像を中心に構成することが想定されている。しかし実際には映画の撮影にはカメラ、照明、音声などからなる大がかりな機材が必要である。撮影機材の数が限られていたこと、撮影隊の移動や撮影準備には時間を要したことなどから、高性能のビデオカメラが普及した今日とは異なり、フィルム時代に実際に起こった事件・事故・戦闘などを撮影することは、よほどの幸運に恵まれない限り難しかった。そのため、記録映画の製作においても再現映像の撮影はどの国でも広く行われて来たのであり、再現映像を抜きにして記録映画は成立しなかったといってもよいだろう。また、記録映画には製作者が視聴者に伝えようとするテーマやメッセージが必要であり、それを明確にするためにも一定の演出は必要で、再現もそうした演出手法の一つと見なすことができる。しかしそこで問題となるのは、その再現映像の内容である。記録映画の再現映像は、一定の強調や単純化のための演出があるにしても、事実即した再現を撮影したものでなければならない。本来記録映画で使うことができる再現映像は、出来事が起こった直後に、当事者が、現場で、事実に基づいて再現し、撮影されたものでなければならないのである。フィクションはもちろんのこと、当事者が、現場で再現して撮影したものであっても、事実に基づいていなかったり、時間が経過していたりすれば、そうした再現映像を記録映画に使用することは許されない。

しかし、エリ・ワルラーモフ監督が『中国人民の勝利』の製作のために人民解放軍の各野戦軍と、多くの将軍たちの全面的な協力を仰いで撮影した国共内戦の再現映像は、実人物が出演している劇映画の映像というべきものであって、記録映画の中で使用することが本来許されない映像である。これらの再現映像の撮影には、カ・シーモノフが手がけた脚本を基に作成された撮影台本が使われており<sup>17)</sup>、人民解放軍の戦歴における名場面を劇的に見せるために、事実の強調や単純化といった演出のレベルを超えて、もはやまったくのフィクションと言わざるを得ない映像も数多く撮影され使用された。こうした再現映像の撮影を通じて、協力した中国人スタッフたちは、テーマやメッセージを際立たせるために

は、記録映画の製作においても事実に基づかない再現映像の撮影と使用が許されるという考えを持つようになったであろう。事実、1950年代から70年代の中国の記録映画には、事実に基づかない再現映像が、実際の出来事を撮影した映像としてしばしば登場するのである。それらは、実在する場所で、実在する人物（俳優ではない）が演技したフィクション（劇映画）の映像と見なさざるを得ないのである。

さらに、再現映像を実写の記録映像にモンタージュするかたちで使用したことも後世に禍根を残した。抗日戦争期に延安を目指す学生たちの再現映像に、実際に延安時代に撮影された毛沢東などの記録映像をモンタージュしたことなどがその一例である。その結果、その後の中国の記録映画製作において、このとき撮影された国共内戦の再現映像が、実写の記録映像と渾然一体となって使用されるようになり、ついにはどれが実写でどれが再現かも判断できなくなるという事態を引き起こした。『中国人民の勝利』の製作のために撮影された人民解放軍の北京入城式の再現映像が、日本では長らく実写の映像と誤解され、テレビのドキュメンタリー番組で使われたり、様々な出版物に写真が掲載されたりしたのも、こうした問題に起因しているのである。

## おわりに

本稿では、1949年のソ連映画専門家集団の訪中の経緯を紹介するとともに、『中国人民の勝利』と『解放された中国』という2本の長編記録映画の内容分析を行ってきた。この2本の記録映画に見られるテーマの設定の仕方、ストーリーの展開、演出や表現の手法、撮影の技法は、その後製作された数多くの中国記録映画と共通するものである。このことから、この時ソ連の映画専門家とともに記録映画製作に携わった中国人スタッフたちは、その製作過程を通じてソ連の記録映画製作の思想と手法を吸収し、その後の記録映画製作に活かして行ったと考えることができる。このとき中国にもたらされたのは、政治的な目的のためには、客観的な事実よりもテーマが優先されるという社会主義リアリズム<sup>18)</sup>という思想と、それに基づいた記録映画という名前の宣伝映画（プロパガンダ映画）の製作手法だった。記録映画においても劇映画と同じよう



にまず脚本が書かれ、その内容に合わせて現実を描くというソ連式の製作手法が定着していった。

1950年以降も中国の映画関係者のソ連への留学や、中ソの映画関係者の交流は続いており、その過程で中国映画がソ連映画から受けた影響も検討する必要がある。しかし、1949年のソ連映画専門家集団の訪中と、『中国人民の勝利』と『解放された中国』という2本の長編記録映画の製作が中国に与えたインパクトは非常に大きなものであり、中国に記録映画というジャンルが確立される上で大変重要な役割を果たしたと見ることができる。

こうして確立されたソ連式の中国記録映画は、その後中国社会で絶大な威力を発揮する。中国共産党は土地改革や社会主義的改造の推進、共産党の権威確立などに記録映画を活用して行った。また、毛沢東は農業集団化や人民公社化運動などの推進、大躍進や文化大革命への大衆動員の手段として記録映画を積極的に利用したし、鄧小平も記録映画を通じて改革開放路線の周知徹底を図り、現在に至っているのである。

## 注

- 1) 拙稿「中国人の対日イメージの原点を探る—中国記録映画（1949～72年）が伝えた日本—」『放送研究と調査』2007年9月号。
- 2) 拙稿「映像アーカイブスに期待される役割とは—中国の最新事情を手がかりに—」『放送研究と調査』2007年6月号。
- 3) 高維進『中国新聞記録電影史』、中央文献出版社、2003年。
- 4) 単万里『中国記録電影史』、中国電影出版社、2005年。
- 5) 前掲注3)、79-90頁。
- 6) 前掲注4)、140頁。
- 7) エス・ゲラーシモフ監督の略歴については、亀井文夫・土方敬太共著『ソヴェト映画史』（白水社、1952年）、ヴェ・ジダン序・監修、ア・グロシェフ他著 高田爾郎訳『ソヴェト映画史』（三一書房、1971年）、山田和夫『ロシア・ソビエト映画史』（キネマ旬報社、1997年）を参照。
- 8) エリ・ワルラーモフ監督の略歴についても同前。
- 9) 前掲注4)、141頁。
- 10) 同前、140頁。
- 11) 同前、140頁。
- 12) 同前、141頁。

- 13) 中ソ合作の記録映画『中国人民の勝利』にはロシア語版と中国語版が存在している。本稿では北京にある中央電視台新影制作中心（中央テレビ新影制作センター）が保存する中国語版の映画と台本を利用した。1953年に設立された中央新聞紀錄電影製片廠は、その後数多くの記録映画とニュース映画を製作し、1980年代後半まで大きな影響力を持ち続けた。しかし1990年代に入るとテレビの影響力の拡大とともに、国が一元的に管理していた記録映画・ニュース映画の制作・配給体制が崩れ、1993年に中央電視台の傘下に入った。現在は中央電視台の新影制作中心としてテレビ番組の制作などを手がけている。そのアーカイブは、延安電影団、東北電影、北京電影、新影が撮影・製作したほぼすべての記録映画と、台本などの関係資料を保存している。
- 14) 中ソ合作の記録映画『解放された中国』についても同前。
- 15) そうした記録映画には、『兩種命運的決戰』（1961年）、『光輝的歷程』（1962年）、『人民戰爭勝利萬歲』（1965年）、『星火燎原』（1977年）などがある。
- 16) そうした映画には、1953年に製作された記録映画だけでも、『偉大的土地革命』、『好日子那裡來』、『幸福兒童』、『為了人民健康』などがある。
- 17) 前掲注4）、142頁。
- 18) 同前、143頁。